

## 様相の形而上学における傾向性主義を退ける

大畑浩志 (Hiroshi Ohata)

大阪市立大学大学院文学研究科

---

様相論理に意味論を与える可能世界とは実際いかなる対象であるのかという問題は、A, プランティンガや D, ルイスによって 1970 年代以降積極的に議論され、いまなお様相の形而上学における中心的なトピックであり続けている。可能世界は時空間に位置をもつ具体的対象であるという見方を退け、存在するのはこの現実世界のみであるという主張を、現実主義と呼ぶ。これまで現実主義は、可能世界が何らかの意味で存在することは認めた上で、それがどのように構成されるかという問題に取り組んできた。しかし近年、可能世界の存在それ自体を退け、可能性や必然性の分析を本質や傾向性によって行おうとする立場が現れている。これらの立場は、あらゆる様相的言明は現実世界の存在者がもつ性質のみによって説明されると主張するため、可能世界を認めるこれまでの現実主義と区別され、しばしば新しい現実主義ないし徹底された現実主義などと呼ばれる。

本発表は、2000 年代以降盛んに論じられている、新しい現実主義の中の傾向性主義を取り上げ批判的に検討する。傾向性主義によれば、「このガラスが割れることが可能である」という命題の真理は、このガラスの割れやすさによって真となる。傾向性主義の基本的な主張は、「任意の事態  $S$  が可能であるのは、ある現実の傾向性  $d$  が存在し、 $d$  のあらわれが  $S$  であるとき、そしてそのときに限る。」と一般化される。

傾向性主義は、可能世界という論争的な哲学的装置を用いず、より自然主義的に様相的言明の分析を与えることができる。しかし、傾向性による分析は、上記の例のような単純なケースでは威力を発揮するものの、より複雑な言明のケースではさまざまな困難を抱える。たとえば、「現実の偶然的存在者が、いっさい存在しなかったことは可能である」という命題を、現実の存在者がもつ傾向性のみによって説明することは容易ではない。こうした複雑な様相的言明の分析を与えるため、B, ヴェッター (2015) は傾向性主義をより洗練させ、存在者の傾向性だけでなく能力 (ability) やパワー (power) も考慮に入れた潜在性主義という立場を提唱している。本発表においては、潜在性主義においてもなお分析できない様相的概念 (たとえば可能個体など) が存在し、傾向性主義はどのような形であっても魅力的な立場とはなりえないことを明らかにする。

Vetter, B. (2015), *Potentiality. From Dispositions to Modality*. Oxford: Oxford University Press.